

# 作文の課題によってどのように文章産出過程が変わるか

— 上級日本語学習者の場合 —

衣川 隆生

## 要 旨

本稿の目的は、作文課題の差が上級日本語学習者の文章産出過程にどのような影響を与えるかを分析することにある。文章を産出する際、文章の読み手や目的を意識しながら書くことが重要であるという指摘は多い。しかし、それが実際に文章産出過程でどのような行動として具現化されるかを分析した研究は少ない。そこで本研究では「意見を述べてください」という意見文課題と「反対の意見を持つ者を説得する文章を書いてください」という説得文課題を上級日本語学習者に与え、課題の差が文章産出過程にどのような影響を与えるかを分析した。その結果、1) 意見文では主に次に何を書くかしか計画していないのに対して、説得文では文章を書きながら課題を読み返し、読み手や目的に合わせて文章全体の内容や構成を再度計画する行動が観察された。2) 意見文では表現方法に焦点を当てた推敲しか観察されなかったのに対して、説得文では、新しいプランに合わせて内容にも焦点を当てた推敲が行われていることが明らかとなった。これらの結果をもとに、本稿の最後では上級日本語学習者に対する作文指導の方法について提言する。

【キーワード】 構想の過程 文章化の過程 見直しの過程 意見文 説得文

## The Effect of Writing Tasks on Composing Processes of an Advanced Japanese Learner

Kinugawa, Takao

This study examined the effect of writing tasks on composing processes of one advanced Japanese learner. In the experiment, the subject was asked to write an opinion essay and a persuasion essay. Then these were analyzed according to how the composing processes were influenced by the difference between the tasks. The result showed the following differences: 1) In the opinion task, the writer planned only what he wrote for the next paragraph in the planning process. On the other hand, the writer considered the restrictions in terms of reader and purpose for the persuasion task, then, he modified the contents of the texts in order to fit these restrictions. 2) In the opinion task, only editing of expressions was observed. However, in the persuasion task, revision of the contents were also observed. Finally, the author discusses how Japanese teachers instruct in advanced Japanese writing classes.

## 1. はじめに

文章を産出する際、文章の読み手や目的を意識しながら書くことが重要であるという指摘は多い。これは文章による伝達が時間、空間を越えて起こるものであり、会話に比べて読み手との場の共有がきわめて小さい状況で成立するものだからだろう。書き手が伝えたいことを的確に伝えるためには、読み手との共有の場をできるだけ大きくする必要はある。そのためには、読み手がどのような知識を持っているのか、どのような立場に立っているのかなどを考えながら文章を書く必要がある。

では、どうすれば読み手や文章の目的を意識しながら文章を書き進めることが可能となるのだろうか。杉本（1989）は、読み手や文章の目的が具体的に指定された課題を示すことで、書き手に目的や読み手のことを意識させることができると述べている。また、Berkenkotter（1981）は、読み手を説得するようなタイプの文章を書いている時に最も頻繁に、しかもいろいろな観点から読み手のことを意識すると述べている。

では、日本語学習者のように言語的負担が多い書き手であっても、適切な課題を示すことで、読み手や目的を意識しながら文章を書き進めていくことが可能になるのだろうか。

Raimes（1985）は英語を第二言語として学習している書き手<sup>(1)</sup>に、読み手と目的を指定した課題と指定していない課題を与え、その差を分析している。その結果、課題で指定されている読み手と目的が、書き手の文章産出過程に影響を与えた形跡はなかったと述べている。

このように、言語的な負担が大きい場合には、たとえ適切な課題を与えたとしても文章産出過程で読み手や目的を意識することがむずかしい可能性もある。したがって言語学習者に作文の指導を行う時には、適切な課題を与えるだけでなく、読み手や目的を意識することをストラテジーとしてとらえ、そのストラテジー訓練を行う必要もあるのではないだろうか。

そこで本稿では、ストラテジー訓練を検討する前提として、「読み手や目的を意識しながら書く」ことが具体的にどのような行動によって達成されるかを明らかにすることを目的とする。そのために、上級日本語学習者に「話題について意見を述べてください」という意見文課題と「反対意見を持つ人を説得するような文章を書いてください」という説得文課題を与える。そして、課題によって文章産出過程に大きく差の出た一人の書き手を事例としてとりあげ、その文章産出過程の差を質的に分析する。

分析の結果にもとづき、本稿の最後では、文章産出過程で「読み手や目的」を意識するストラテジーを訓練するためには、どのような点に注意して作文指導を行えばいいかについての議論を行う。

## 2. 研究の枠組み

本稿では、衣川（1994）にもとづき、文章産出過程を次のように考える。

文章産出過程に関わる要因には「課題状況」、「書き手の長期記憶」、「文章産出過程」がある（Hayes & Flower, 1980）。「課題状況」を構成するものには、「作文課題」と「すでに書き上げられた文章」がある。

「文章産出過程」とは、文章を書き上げるという目標に到達するために、現在の状態を変換していく一種の問題解決の過程であり、それは「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」という三つの下位過程から構成される。そして、それらの下位過程にはそれぞれに達成すべき目標が存在する。本稿ではこの目標を文章産出過程における下位目標と呼ぶ。

構想の過程には「プランを計画する」という下位目標があり、書き手は与えられた作文課題から「話題」や「目的」を抽出し、その認識を刺激としてプランの計画を始める。文章化の過程には「構想の過程で計画されたプランを言語表現化する」という目標がある。見直しの過程には「文章化の過程で言語表現化された表現を整え磨く」という目標がある。

三つの下位過程は、それぞれの目標を達成するための行動、および行動の連鎖によって構成される。例えば、話題を決めるためには、記憶の中から、話題に関する情報や、読み手に関する情報を引き出さなければならない。書き手は必要な情報を引き出そうとして、自問自答したり、課題文のキーワードの部分に下線を引いたりするだろう。本稿では、これらの目標達成のための行動を書き手の文章産出の戦略と考える。これらをまとめると、表1のようになる。

表1 文章産出過程の下位分類

| 下位過程   | 下位目標     | ストラテジー例       |
|--------|----------|---------------|
| 構想の過程  | プランを計画する | 自問自答する→計画する   |
| 文章化の過程 | 言語表現化する  | リハーサルする→書き下ろす |
| 見直しの過程 | 文章を調べ磨く  | 読み返す→修正する     |

本研究ではこの考え方を分析の枠組みとして用い、「読み手」や「文章の目的」を意識する場合とそうでない場合とでは、文章産出過程のどの部分に変化するかを分析することにする。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 研究協力者

名古屋大学大学院に在籍する留学生6名に協力を得た<sup>(2)</sup>。本研究では、分析の結果から、課題に示されている読み手や目的の影響で文章産出過程に変化が観察された協力者1名を事例として取り上げ、意見文と説得文の産出過程の差を分析する。以下、協力者をSと示す。Sは大学院で日本語文化を専攻している留学生であり、資料収集時点で、5年9か月の日本語学習歴と1年9か月の在日期間を持つ中国語を母語とする男性である。

#### 3.2 資料収集方法

資料収集は以下の方法で行った。

まず、協力者に6つの選択肢の中から文章の話題を選んでもらった。話題を選択式にしたのは、

話題に関する知識がないために文章が書けないという事態をさけるためである。

次に、協力者に課題文を渡し、それを実験者が音読し、内容理解の確認をした。第一週に意見文課題を、第二週に話題を変えて説得文課題を与え、文章を書いてもらった。協力者が選択した課題については資料を参照されたい。文章産出過程で、何を考え何をしているかを推定するための資料は、発話思考法<sup>(3)</sup>とビデオ録画によって収集した。文章の字数、時間の制限は与えず協力者が終了の合図を出すまで書いてもらった<sup>(4)</sup>。表2にSの調査日時、所要時間、文章の量的な分析結果を示す。

表2 資料収集日時及び作成

|     | 日時       | 所要時間   | 文数  | 文字数  |
|-----|----------|--------|-----|------|
| 第一回 | 93年5月20日 | 33分45秒 | 13文 | 600字 |
| 第二回 | 93年5月27日 | 41分50秒 | 12文 | 442字 |

さらに、文章を書いた一週間後に、発話の不明瞭な部分や、協力者がとった行動の目的が不明な部分など内省報告が必要な場合はフォローアップインタビューを行った。

### 3.3 資料分析方法

文章産出過程における行動を推定するために、得られた資料を以下の手順で分析した。まず、発話思考法によって得られた音声資料を文字化した。次に、あるまとまった行動を行なっていると推定される単位で文字化資料を分割し、それぞれに行動範疇名をつけた。行動範疇名をつける際には、Raimes (1985) と安西・内田 (1981) が分析に用いた範疇を参考にした。分析の結果、計画、明確化、検索、問いかけ、リハーサル、書きおろし、繰り返し、読み返し、翻訳、評価、修正、推敲、保留、要約、沈黙の15種類の行動範疇とその他に分類された。行動範疇の分類基準に関しては衣川 (1993) を参照されたい。最後に、それぞれの行動単位が、どの下位目標を達成するために行われているかを分析し、その結果をもとに協力者の文章産出過程を「構想の過程」、「文章化の過程」、「見直しの過程」に分割した。

## 4. 結果と考察

ここでは、意見文と説得文の文章産出過程を主に次の三つの観点から分析し、その特徴を把握する。

- 1) 第一文を書きはじめる前にどのようにしてプランを計画しているか。
- 2) 文章を書いている途中でどのようにしてプランを計画しているか。
- 3) 実際に文章をどのように書き上げているか。

#### 4.1 第一文を書き始める前にどのようにしてプランを計画しているか

##### 4.1.1 意見文

Sは第一文を書き始める前に、プランの計画に1分の時間を使っている。この間の文字化資料の抜粋を表3<sup>(5)</sup>に示す。

表3 構想の過程1

| 行動範疇     | 文字化資料                    |
|----------|--------------------------|
| 課題文の読み返し | (省略)                     |
| 問いかけ     | どうしよう                    |
| 話題の計画    | 最近、日本、経済的                |
| 表現のリハーサル | 最近から、最近から、日本が経済的なのかそういう、 |
| 書き下ろし    | 日本は                      |

Sは課題文をもう一度読み返し、自分自身に「どうしよう」と問いかけている。そして、その答を探す過程で第一文で書く「最近」「日本」「経済的」という話題を計画している。そして次に計画した話題を使って第一文のリハーサルを行い、「日本の経済的な発達にともなって、国際社会では政治面においても経済面においてもその無視できない重要な役割を果たしている」という第一文を書きはじめている。

このプロトコルから推測できることは、Sは課題文から話題を明確にし、その話題を検索のキューとして活用していることである。その検索は「問いかけ」をきっかけとして始まる。自分自身に問いかけ、その答をさがす。それを繰り返すことによって、必要とする情報を引き出ししていると考えられる。そして、その情報をもとに第一文の表現を考え、それをリハーサルしてから文章を書きはじめている。この一連の流れを行動の連鎖としてまとめると次のようになる。

**課題文の読み返し→話題の明確化→問いかけ→(検索)→話題の計画→リハーサル→(評価)<sup>(6)</sup>**

この間、文章全体の内容や文章の構成を考えていることを示す行動は観察されなかった。

##### 4.1.2 説得文

文章を書き始める前に観察された「構想の過程」には、意見文と説得文の間で大きな変化が見られなかった。さらに、この間文章全体の内容や文章の構成を考えていることを示す行動は見られないという共通点も観察された。

## 4.2 文章を書いている途中でどのようにしてプランを計画しているか。

### 4.2.1 意見文

表4の文字化資料の抜粋は、意見文の最後の段落を書きはじめる前に観察された「構想の過程」である。

表4 構想の過程2

| 行動範疇  | 文字化資料                                      |
|-------|--------------------------------------------|
| 読み返し  | (省略)                                       |
| 問いかけ  | 最後か、ん、                                     |
| 話題の計画 | 我々は外来語を取り入れる、外来語に関して、もう一度検討する、そういう、姿勢が必要か、 |
| リハーサル | ここで、                                       |
| 評価    | ちょっと、変だけど、                                 |
| 書き下ろし | ここで                                        |

Sは第二段落を書き終えた時点で、それまでに書き上げた文章を読み返し、「最後か、どうしよう」と自分自身に問いかけている。そのうえで、結論の段落でどのような話題を書くかを計画し、そのリハーサルを行っている。そして、その内容を「ちょっと」と否定的に評価しながらも、そのままの形で書き下ろしている。

この例からわかることは、文章を書いている途中に生起する構想の過程の特徴が、第一文を書きはじめる前に生起する「構想の過程」と変わらない特徴を持っていることである。つまり、Sはここでも文章を読み返すことによってそれまでに書いてきたことの話題を明確にし、その話題を検索のキューとして情報を検索している。そして検索の結果引き出された情報をもとに言語表現を計画し、それをリハーサルして文章を書きはじめている。この一連の流れを行動の連鎖としてまとめると次のようになる。

読み返し→(話題の明確化)→問いかけ→(検索)→話題の計画→リハーサル→(評価)

また、ここでも文章全体の内容や文章の構成を考えていることを示す行動は観察されなかった。

### 4.2.2 説得文

説得文では、文章を書いている途中で表5で示すような「構想の過程」が観察された。

表5 構想の過程3

| 行動範疇     | 文字化資料                                                            |
|----------|------------------------------------------------------------------|
| 課題文の読み返し | (省略)                                                             |
| 話題の明確化   | 問題は、何で単身赴任しなきゃならないのかっていうことですね、                                   |
| 問いかけ     | 海外進出のときは、どうしたらいいでしょう、                                            |
| 検索       | まさか、家族全部で引っ越して行くのか、とくに言葉、子供の場合、<br>もう、引っ越していったら、本当に、勉強のほうも困りますね、 |
| 課題文の読み返し | 単身赴任制度はやめるべきだ、                                                   |
| 話題の計画    | それじゃもう、海外は考えないほうがいいかな、                                           |
| 評価       | そうしましょう、<br>海外は、もう、ふれないようにしましょう、                                 |

Sは説得文の第二文を書き終えた時点で、課題文を読み返し「問題はなぜ単身赴任制度があるかである」と話題を明確にしている。これは、なぜその制度が存在するのかを考え、その上でその存在意義を棄却しなければ説得はできないと考えたからだろう。そして、その話題に対する答を探すために「海外進出のときは、どうしたらいいでしょう」と自分自身に問いかけている。しかし「海外進出の場合には、単身赴任も妥当性がある」ため、それを文章の話題として使うと説得するという目的が果たせなくなると考え、「海外進出」を話題の候補から除外し、日本国内の問題に話題を絞ろうと計画している。そして、その新しいプランを「そうしましょう」と肯定的に評価し、そのプランにもとづいて次の言語表現を計画している。この一連の流れを行動の連鎖としてまとめると次のようになる。

**課題文の読み返し→話題の明確化→問いかけ→(検索)→話題の計画→(評価)**

行動の連鎖としては第一文を書き始める前や、意見文を書いている途中で観察された構想の過程と大きな差はないが、ここでは文章全体の内容や文章の構成を考えていることを示す行動が行われている。つまり、行動としては「話題の計画」であっても、意見文では「それまでに書いてきた文章に続けて、次に何を書くか」しか主に計画されていなかったのに対して、説得文ではそれまでに書いてきた文章と課題を比較・対照し、必要ならば構成や内容の修正を含む計画を行っているという質的な差が観察される。

**4.3 実際の文章をどのように書き上げているか**

**4.3.1 意見文**

表6の文字化資料の抜粋は「私は別に外来語を取り入れるのに対し、いっさい反対するというわ

けではない」という文を書き上げる際のSの文字化資料である。

表6 文章化・見直しの過程1

| 行動範疇  | 文字化資料                |
|-------|----------------------|
| 書き下ろし | 〈私は別に外来語を取り入れるのに対し〉* |
| リハーサル | いっさいか、               |
| 書き下ろし | 〈いっさい反対するというわけではないが〉 |
| 繰り返し  | 反対するというわけではないが、      |
| リハーサル | わけではないが、             |
| 評価    | 「が」はいらない、            |
| リハーサル | いっさい、反対するというわけではない、  |
| 修正    | 〈「が」削除〉              |
| 繰り返し  | いっさい、反対するというわけではない、  |
| リハーサル | 例えば、                 |

\* 〈 〉 は言語化されない行動を表す

Sはまず「私は別に外来語を取り入れるのに対し」と一気に書き下ろし、次に続く表現を「いっさい」とリハーサルしている。そして、リハーサルした内容を肯定的に評価し、その表現をもとに「いっさい反対するというわけではないが」と書き下ろしている。

次に「いっさい反対するというわけではないが」に続く表現を考えるために、書き下ろした表現を繰り返しているが、その過程で、書いた表現と自分が書きたいこととのズレに気づき、書き下ろした表現から「が」を省略した代案「わけではない」をリハーサルしている。そして、書き下ろした「わけではないが」とリハーサルした代案「わけではない」を比較し、「『が』はいらない」と代案のほうを肯定的に評価し、それにもとづいて、文章を修正している。

この例から、次のようなSの意見文の文章を書き上げる際の特徴が示唆される。

- 1) **書き下ろし→繰り返し→(次の表現の)リハーサル→(リハーサル内容の)肯定的評価→書き下ろし**、  
または、書き下ろした表現と書きたいこととのズレに気づいた場合には、  
**書き下ろし→繰り返し→(代案の)リハーサル→(代案の)肯定的評価→修正**、  
という行動の組み合わせが中心的である。
- 2) 言語表現化するための「文章化の過程」と、書いた表現を整え磨くための「見直しの過程」が交互に生起する。
- 3) 「見直しの過程」は主に文以下の単位の表現方法を整え磨くことに焦点を当てたもので、表現される内容の推敲はほとんど観察されなかった。



### 4.3.2 説得文

Sが文章を書き上げていく文章化の過程には意見文と説得文の間で大きな変化が見られなかった。しかし、書いた文章を整え磨くという見直しの過程では差が観察された。

説得文ではSが「日本の経済の急成長に伴って、日本国内だけではなく、世界各国に日本の企業が進出しています」という文を書き終えた段階で上記4.2.2で示した「構想の過程」が観察され、それに続いて、表7で示すような「見直しの過程」が観察された。

表7 文章化・見直しの過程2

| 行動範疇  | 文字化資料                             |
|-------|-----------------------------------|
| 読み返し  | 日本経済の急成長に、ともなって、                  |
| 評価    | まあ、急成長したからって、別に単身赴任しなきゃってわけではないし、 |
| リハーサル | 日本経済の急成長に伴って、え、経済交流が、あらゆる、        |
| 修正    | 〈「日本国内」→「あらゆる」〉                   |
| リハーサル | あらゆる分野において                        |
| 修正    | 〈「だけではなく、世界各国に」→「分野において」〉         |

Sは「日本経済の急成長に伴って」という書き出しを読み返し、「急成長したからって単身赴任しなければいけないと言うわけではない」と書いた文章を否定的に評価し、その上で「海外の話題は避け、国内問題に限る」というプランにもとづいて、「世界各国に日本の企業が進出しています」という内容を、「あらゆる分野において経済交流がさかんに行なわれています」という内容に変えている。この行動の連鎖は次のようにまとめることができる。

#### 読み返し→評価→リハーサル→(評価)→修正

この例から、構成や内容の修正を含むプランの計画が行われた場合には、新しいプランの方向性に合わせて内容的な推敲も行われるということが示唆される。書き手は読み返すときの基準として新しく計画されたプランを念頭に置き、すでに書いた文章が新しいプランの方向性に合っているかどうかを確認し、必要ならば内容についても変更を加えている。

## 5. 議論

### 5.1 課題状況の変化によって、文章産出過程のどこが影響を受けるか

Sの意見文と説得文の産出過程を比較した結果、次のような類似点及び相違点が明らかになった。

まず、類似点としては、

- 1) 第一文を書き始める前の「構想の過程」は、

**課題文の読み返し→話題の明確化→問いかけ→（検索）→話題の計画→リハーサル→（評価）**

という行動の組み合わせが中心的であった。また、この時点で文章全体の内容や構成を考えていることを示す行動は観察されなかった。

- 2) プランを言語表現化する際の「文章化の過程」は、

**書き下ろし→繰り返し→(次の表現の)リハーサル→(リハーサル内容の)肯定的評価→書き下ろし**

という行動の組み合わせが中心的であった。

次に、相違点としては

- 1) 文章を書いている途中に生起する「構想の過程」には相違点が見られた。意見文では、一つの段落を書き終えた時点で、主に「次の段落で何を書くか」を計画していたが、文章全体の内容や構成を考えていることを示す行動は観察されなかった。これに対して、説得文では文章を書いている途中で、もう一度課題文を読み返し、課題に示されている項目とそれまでに書いてきた文章とを対照し、内容が「読み手」を「説得する」という課題に合わない場合には構成や内容の修正を含む計画を行っていた。
- 2) 文章を書いている途中に生起する「見直しの過程」には相違点が見られた。意見文の「見直しの過程」は主に

**書き下ろし→繰り返し→（代案の）リハーサル→（代案の）肯定的評価→修正**

という行動の組み合わせからなり、ここで整え磨かれる項目は、主に表現の方法に焦点を当てたものであった。

一方、説得文では、

**読み返し→評価→リハーサル→（評価）→修正**

という行動の組み合わせが観察され、ここでは書き下ろした言語表現がプランと合っているかどうかを確認し、必要ならば内容についても変更を加えていた。

では、なぜこのような差が生じたのであろうか。

文章を産出する行為は「書き手が自分自身でコンテキストを作りながら、そのコンテキストに制限される行為（茂呂，1993，p. 31）」である。これはつまり、文章を書くことによって、書き手は時間的にも空間的にも隔てられた読み手との共有の場を構築していくが、同時にその共有の場に

よってこれから書く文章やすでに書いた文章の解釈が限定されるということを意味する。

文章を書きはじめる前には、課題だけがコンテキストを構成する要素として存在している。したがって、書き手は課題を読み返し、そこからコンテキストの構成要素を抽出し、それにもとづいてプランを計画する。これは意見文であっても説得文であっても同様である。そのため、どちらの課題でも文章を書く前の構想の過程には差が観察されなかったのだろう。

では、文章を書き進める過程で観察された構想の過程はどうだったのだろうか。

今回の調査ではどちらの課題でも段落を書き終わるたびにプランの計画が観察された。この計画がなぜ生じるのかというと、「これから書こうとすること」が「新しく形成されたコンテキスト」の制限下では、どのように解釈されるかを考えなければならないからだろう。つまり、事前にプランを計画する時には、その時点のコンテキストに依存している。しかし、新しく書いた文章がコンテキストの構成要素に加わることによって、コンテキスト自体も変化する。変化したコンテキストのもとでは、事前に計画したプランが書き手の意図を反映しない場合も出てくる。書き手は伝えたいことを的確に読み手に理解してもらうために、「新しく形成されたコンテキスト」が「これから書こうとすること」の意味解釈にどのような影響を与えるかを確認し、それをもとに計画を立てなければならないのである。

意見文の場合には、課題で示されている「話題」がコンテキストの構成要素として存在している。そして、文章を書きはじめると、その文章が新しくコンテキストを構成する要素として加わる。そのため、一つの段落を書き終えた段階で、書き手は「書いた文章」を読み返し、「これから書くこと」と「新しく形成されたコンテキスト」の間にズレがないかを確認し、そのうえで「次に何を書くか」を計画していたのだろう。

一方、説得文では、課題で示されている「話題」、「読み手」、「書き手」がコンテキストの構成要素として存在する。また、書いた文章も新しくコンテキストを構成する要素として加わる。このようにコンテキストを構成する要素が多い場合には、課題文をもう一度読み返し、どのような構成要素があるかを明確にし、そのうえでプランを計画する必要がある。その際にも、「話題とずれていないか」、「読み手を説得できるか」、「書いた文章と一貫性が保てるか」などの観点から多角的にプランを評価しなければならない。この多角的な評価によって、事前のプランやすでに書いた文章の問題点が明らかになり、文章の内容や構成までも変更するような計画が行われたのではないだろうか。

次に、「見直しの過程」の差はどこから生じたものであろうか。

衣川（1994）は、日本人大学院生の見直しの過程<sup>(7)</sup>を分析し、「相手を説得する場合には曖昧な表現は避けて事実を中心にする」などの推敲の基準が確立されると、その基準にもとづいて内容に一貫性を持たせるための推敲が促進されることを示している。そして、このような推敲の基準は、見直しの過程で試行錯誤することによって確立されることも示唆している。

意見文の産出過程では、コンテキストの制限が少ないために、主に「何を書くか」が意識の中心

であった。つまり、「自分が表現したい内容を正確に伝えているかどうか」という観点からのみ書いた表現を評価していると考えられる。そのため、整え磨かれる項目は、主に表現の方法に焦点を当てたものになったのだろう。

これに対して、説得文の産出過程では、プランに対して多角的な評価が行われ、その結果「読み手を説得するために、危ない話題（海外の問題）は避ける」という推敲の基準が確立したのではないかと考えられる。そのため、その基準に合っているかどうかという視点からすでに書いた文章を評価し、もし基準との間にズレがある場合には内容についての推敲も行われたのではないだろうか。

## 5.2 作文指導への示唆

上記の議論で示唆されたことは、「文章の読み手や目的」を意識しながら文章を産出する行為が、つねに課題文と書いた文章を読み返しコンテキストが意味解釈に与える影響を考慮しながら、プランを計画したり修正したりする行為だということである。さらに、プランが拡大されたり修正された場合には、そのプランとすでに書いた文章との間にズレがないかどうかを確認し、もし必要ならプランに合わせて内容についての推敲も行うということも示された。

では、学習者にこのような文章産出過程を体験させるためには、教師はどのような点に注意して指導すればいいのだろうか。

第一に、杉本（1989）が指摘しているように、作文の課題を与えるときには、読み手や文章の目的が具体的に指定された適切な課題を示すことが重要であろう。しかし、前述したように、言語的な負担が多い場合には言語表現化することに意識が集中し、課題で示されているコンテキストの構成要素にまで意識が向けられない可能性がある。

したがって、文章を書く前の段階で、課題からどのような要素を抽出すればいいか、そして、それらの構成要素が変わることで、内容や文章構成がどのように変化するかを認識させる必要がある。

そのためには、まず与えられた作文課題から、「読み手」は誰か、その読み手に対しては「です・ます体」を使うべきかどうか、「である体」のほうがいいのか、どんな目的を持った文章を書けばいいかを抽出する質問を与えるという方法が考えられる。初期の段階では、この質問には「説得」「説明」「勧誘」などの選択肢を設けておいたほうがいいだろう。

次にコンテキストの構成要素が変わることによって、文章の内容や構成がどのように変わるかを認識させる必要がある。そのために、たとえば、学習者の研究計画や専門を「日本人の中学生」に「説明」するにはどんな内容でどんな文体を使えばいいのか、そして「指導教官」に「説明」するときにはどうすればいいかを議論させるのである。これによって、学習者にコンテキストが意味解釈に与える影響を意識させることができるだろう。

第二に、文章を書き進める過程でつねに「読み手」や「目的」などの観点から多角的にプランや文章を評価させる必要がある。堀田（1993）は文章に対する批判的意見が書き手の意識に及ぼす影響を分析し、自分が書いた文章を自己批判するよりも他者が批判するほうが文章に及ぼす影響が多

いことを指摘している。これは、自分のプランや文章を自分自身で評価するよりも、他者が評価したほうが書き手の意識に及ぼす影響が大きいということも意味するだろう。つまり、段落を書き終わるたびに、他者によってその文章を評価してもらい、その評価と意見をもとに、次の段落のプランを計画させたほうが文章に与える影響が大きいと考えられる。

したがって、文章を書きながらプランや書いた文章を多角的に評価するためには、まず課題を与える時点で、立場や読み手を変えた課題をグループ単位に与え、段落を書き終えた時点で、それぞれの文章を交換し、その文章に対する評価をさせるという方法が考えられる。たとえば、「あなたはこの意見に賛成ですか、反対ですか、それはどうしてですか」という評価シートを学習者に与え、その結果を口頭、または短い文章で書き手に与えるのである。この活動は、他者の視点を自分の文章に盛り込むために行うのであるが、他者が書いた文章を評価することで、学習者に「多角的な評価の観点」を身につけさせることができるという目的も持っている。したがって、初期の段階では教師が批判的な読み手になることも可能であるが、できるだけ早い段階で学習者同士で意見の交換ができるようにしたほうがいだろう。

## 6. おわりに

本稿では、上級日本語学習者1名を事例を取り上げ、意見文課題と説得文課題が書き手の文章産出過程にどのような影響を与えるかを検討し、その結果をもとに作文指導への提言を行った。

本稿では分析の対象が1名と少ないため、ここで指摘した結果や指導法の提言はもちろん一般化できるものではない。しかし、意見文と説得文の文章産出過程では、大きく文章を書き上げている途中に生起する「構想の過程」と「見直しの過程」に差が出るということを指摘できたことは、本研究の成果であると考えられる。

今後は、さらに多くの、そしてさまざまなレベルの書き手の文章産出過程を対象にしてここで示した特徴を検証するとともに、適切な課題を与えられても文章の目的や読み手のことが意識できない書き手は、なぜ意識できないのか、どうすれば意識させることができるかを検討する必要がある。同時に、議論で提言した指導法が、文章の目的や読み手を意識できない書き手に対して実際にどのような効果をあげるものか、そしてどのような問題点があるかの分析も行う必要がある。

## 注

- (1)Raimes (1985) の被験者は Hunter College で週6時間の初級 ESL 作文コースに在籍していた学習者である。このコースの学習者は言語能力ではなく作文の能力によってクラス分けされており、主に効果的に文章が産出できない学習者がこのコースに在籍している。被験者を母語別に分類すると中国4人、ギリシャ2人、スペイン1人、ミャンマー1人となる。
- (2)資料収集は、1993年5月から6月にかけて行われた。
- (3)発話思考法 (think-aloud method) とは、文章を書く過程で頭に浮かんだことや考えていること

をどんだん口に出してもらい、それを記録する方法であり、問題解決の過程を明らかにする手法として一般的に用いられている。

(4)協力者が文章産出に要した時間は、最短で27分40秒、最長で123分25秒であった。また、産出した文章の量は、最短で358字、最長で962字であった。

(5)表内の発話プロトコルの例は、読みやすくするため、「ん」「あ」などの埋め草的な要素や繰り返しは削除した。

(6) ( ) の要素は任意要素を、< > の要素は下位過程レベルの要素を示す。

(7)衣川 (1994) では「見直しの過程」を「推敲過程」と呼んでいる。

## 引用文献

1. Berkenkotter, C. (1981) Understanding a writer's awareness of audience, *College Composition and Communication*, 32 : 338-399
2. Hayes, J. R. & L. S. Flower. (1980) Identifying the Organization of Writing Processes, in Gregg, L. & E. Steinberg. (eds.) , *Cognitive Processes in writing*, Lawrence Erlbaum Associates Publishers
3. Raimes, A. (1985) What unskilled writers do as they write: A classroom study of composing, *TESOL Quarterly*, 19 : 229-258
4. 安西祐一郎・内田伸子 (1981) 「子どもはいかに作文を書くか?」『教育心理学研究』29-4 : 323-3325.
5. 衣川隆生 (1993) 「日本語学習者の文章産出方略の分析」『ことばの科学』6 : 51-77
6. 衣川隆生 (1994) 「日本人大学院生の文章推敲過程」*The language teacher*, 18-2 : 26-29
7. 衣川隆生 (1995) 「大学院留学生はどのように文章を書き上げているか—効率的書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴」*JALT Journal*, 17-2 : 197-212
8. 杉本卓 (1989) 「文章を書く過程」『教科理解の認知心理学』1-48 新曜社
9. 堀田朱美 (1993) 「文章の産出過程における書き手の意識の及ぼす批判的意見の影響」『教育心理学研究』41-4 : 12-21
10. 茂呂雄二 (1988) 『なぜ人は書くのか』(認知科学選書16) 東京大学出版

## 〈付記〉

本稿は、1995年11月に行われた The 21 st annual JALT International Conference での口頭発表の内容に加筆、修正を加えたものである。

## 資料

### 資料1 意見文課題

日本では数多くの外来語が使われています。特に雑誌などではどんどん新しい外来語が使用されています。その書き方も外国語の発音にできるだけ近いものを使おうという考えの人と、できるだけ日本語にある発音を使おうという考えの人がいます。

このような「外来語の問題」についてのあなたの考えを書いてください。

### 資料2 説得文課題

現在家族持ちで転勤をする人のうちの32.5%の人が単身赴任をしています。単身赴任者を年齢別で見ると、40歳代が54.5%と半数以上をしめています。

単身赴任は、経済的に負担が多だけでなく、家族関係が悪くなったり、子どもの成長にも悪い影響を与えるので、やめるべきだという人もいます。反対に、子供の教育のためには、学校をかわるよりも同じところで勉強したほうがいいので、家族全部で引っ越しより単身赴任のほうが良いという人もいます。

あなたは「単身赴任制度はやめるべきだ」と主張する人に賛成する外国人の立場から、単身赴任に賛成している人を説得するような新聞投書を書いてください。

### 資料3 作成文章（意見文）

日本の経済的な発達にともなって、国際社会では政治面においても経済面においてもその無視できない重要な役割を果たしている。

こういう国際状況において、日本と世界各国との交流も次第に盛んに行なわれている。こういう政治的、経済的、文化的な交流につれて、新しい外来語もどんどん取り入れられている。ここで日本語の中の外来語について、考えていきたいと思う。

私は別に外来語を取り入れるのに対し、いっさい反対するというわけではない。例えば、専門用語など、無理に和訳しようと思ったら、適当な和訳がなかなか見つからないし、普及面にも交流面にも好ましくないとされるので、むしろ外来語そのものを使った方がより効果的だと思う。とはいえ、「過ぎたるは及ばざるが如し」という諺にあるように、何もかも外来語を取り入れた方がよいというわけではない。むしろ古くて上品な和語（大和言葉）を使った方がいいのではないかと思う。例えば、和語の「にんにく」があるのに、わざわざガーリックを取り入れなくてもいいのではないかと思う。雑誌とかでどんどん取り入れられている外来語を覚える暇があるぐらいなら、他の勉強などやった方が役に立つのではないかと思う。まして、外来語（日本式の発音の外来語）をかるうじて覚えたとしてもそれに相当する外国を覚えているということにはならないから。

ここで我々は外来語を取り入れる時に際し、慎重に考えるべきだと思う。もし今のままでいくともはや日本語には日本語らしい日本語が見つからない日はそんなに遠くないだろう。

#### 資料4 作成文章（説得文）

日本経済の急成長にともなって、あらゆる分野において経済交流がさかんに行なわれています。こういう状況の下に、単身赴任も急速に増えています。ある調査によりますと、家族持ちで転勤をする人のうちの32.5%の人が単身赴任で、単身赴任者を年齢別で見ると40才代が50%と半数以上をしめているそうです。この調査からもわかるように単身赴任者の半数以上は世帯持ちの人のはずで、独身の人もまだしも、世帯持ちの人にとってはわるいことづくめと思われます。家族をバラバラにして、一人でやっていくのはストレスがたまるばかりです。ストレス解消のため不倫に走ってしまう人も少なくはないでしょう。結局、家族関係がぎくしゃくして、離婚するはめになってしまうケースもまれではないでしょう。また、父性愛がない家族に育てられた子供も不良に走りがちなのではないでしょうか。はたして自分の家族をそこまで犠牲にして、単身赴任する必要があるのでしょうか。私はここで日本企業のおえら方及び一般の人々に単身赴任についてももう一度考え直してもらいたいのです。もっと家族を大切に、単身赴任をなくしましょう。